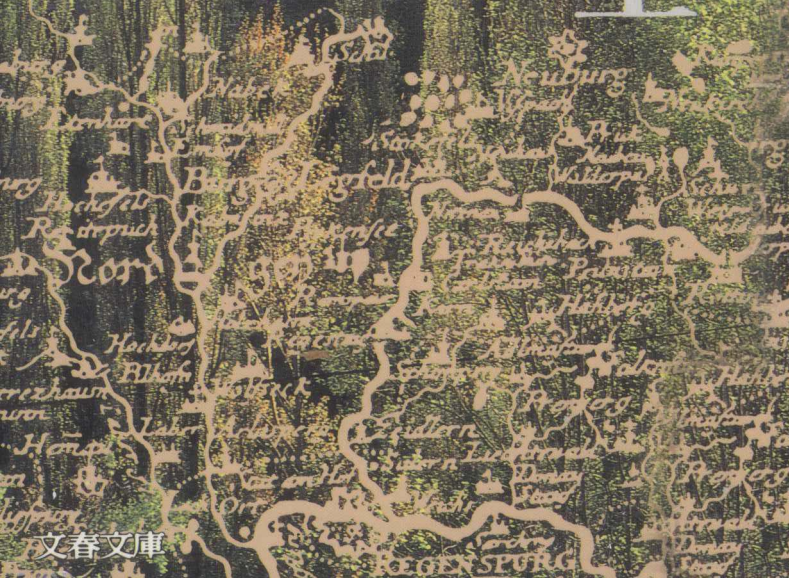


松本清張

霧の会議

上



文春文庫



文春文庫

霧の会議 上

定価はカバーに
表示してあります

1990年6月10日 第1刷

著者 松本清張

発行者 豊田健次

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23 〒102

TEL 03・265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-710674-4



文 藝 春 秋

霧の會議 上／目次

応援頼みに _____ 9

テンプル通り _____ 26

おきて(掟) _____ 45

「待ち」 _____ 66

盗聴工作 _____ 85

二つの声 _____ 108

法王庁の怪聞 _____ 128

「僧院」クワイースター _____ 146

チエルシーの水溜り _____ 170

また逢う _____ 188

アパートホテル _____ 208

隣りの人 _____ 228

パロの戦車	246
落ち合う	271
吊しを見る	294
頭取の「縊死」	317
現場再び	339
処刑	362
警告	386
イギリス脱出	410
空港で	430
夫の場合	446
北ノルマンディ	467

霧の会議

上

応援頼みに

十月も十日をすぎるとロンドンの日あしは急に短くなる。気温が下がりがり、婦人はカーディガンを羽おり、年寄りにはコートをきた。若者は格好よさをかねて革ジャンパーを着こむ。

ハイド・パークのポプラ、クルミ、トネリコなどが黄色く、間にカエデやカシの赤い葉が交じった。風が吹くと上の梢から落葉がはじまる。

公園の東側の鉄柵に沿う南北の大通りがパーク・レーン、それを南へ下がったあたり、東に分れたややせまい道がカーゾン通りである。以前は由緒ある家が散在した静かな屋敷町だった。この地区一帯をメイフェアというが、高層建築のホテル・ヒルトンは、パーク・レーンに面したほうを正面出入口に、カーゾン通りとの角地にそびえる。

八木正八はヒルトンの一階に降りて正面とは反対のほうへ歩いた。ここはきれいな装身具や服飾品の売場がならんでいる。突き切ると裏の出入口になった。

横にトラックなどが置いてあり、壁ぎわには空箱が積み上げてある。屑を詰めたドラム缶がある。高級ホテルも裏はきたない。

しぜんと横通りのカーゾン・ストリートに足を踏み入れる。空がせまいのは屋根が詰まっていた路地のようなところだからだ。うす暗かった。窓の白いカーテンの中に灯が点じている。青空だが午後三時すぎの太陽は光が弱まっていた。

このあたりは四、五階建ての家が多い。間口はせまく、奥行きが深い。むかしの屋敷町は一変した。いまは娼婦の館がならぶ。ヒルトンをはじめ付近のホテル客たちがまたその客である。

館のほとんどが堅実な、こぢんまりとしたフラットふうである。階下がコーヒーショップふうなどところもある。看板は出ていない。小さなウインドウがあつて、*「モデルさん来ています」*とボール紙に文字を書いたのを出している。女たちは昼間から客を待っている。

八木正八は横通りを東へ進む。カーゾン通りは東西の道路ばかりではなく、途中から南北の道が数条に分れ、また東西に派生し、井桁になる如くにして歪み、袋小路に入る。

夜だと、あたかも永井荷風の「遷東綺譚」に書かれた玉の井のように想像されもするが、そうでないのは玉の井が大正時代の新開地、カーゾン通りは十八世紀からの高級住宅地。まだその名残りが同じ区域内に品のいい商店街として、上流階級らしい婦人客の足を運ばせている。

八木正八はそっちへは見むきもせず、横の通りを南へ折れた。この通りは西へ直角に曲つてハートフォード・ストリートという名になる。ここも高層ホテルがならぶ。そのまま、まっすぐ西すればロータリーがあつて、パーク・レーンと合する。ヒルトンの裏から出た八木は、カーゾン通りをコの字形に迂回してここまでできたことになる。

彼はイんで腕時計をのぞいた。三時四十分。空に澄明な蒼い色が残っているが、ビルの谷間は昏れかけている。ホテルの窓の灯がぼつぼつふえる。ヒルトンは完全に隠れていた。

八木ははじめて落ちついて煙草をとり出した。

とたんに、そのうす暗がりにならずくまっていた色が動いたので、足を取られたようにびっくりした。

派手な色のスカーフで頭を包み、赤い格子縞模様の毛布を腰にまいた老婆が低いベンチから背

中を起した。大きな袋に凭りかかっていたのだ。袋の中には衣類から鍋、フライパン、皿にいたるまで「世帯道具」を詰めこんでいる。ローマから来た八木は知らないが、「バッグ・レディ」の愛称をもつ名物もの乞い婆さんで、もうこのシェパード・マーケット辺を根城に何十年となく徘徊している。

箱型の黒いタクシーがきた。まだヘッドライトはつけていない。

「フリート通りへ頼む」

ロンドンのタクシー運転手は市内の地理に精通するのに特殊な訓練と経験を積んでいる。八木はアドレスを書いた紙片を手渡したただだが、なんの迷いもなく、まっすぐな道路と斜めの道路とが落ち合った三叉路のところでタクシーはとまった。

フリート街は名にしおうプレスセンターである。日本の新聞社のロンドン支局（ヨーロッパ総局でも支局でも名称はどうであろうと）は、便宜上たいていロンドン発行の英国新聞社の社屋を借りている。八木がローマ支局に雇われているのは「中央政経日報」で、このロンドン総局は「デリー・ニューズ」の社屋五階にあるはずだった。

八木が新聞用紙を積んで去ったトラックの来た方角に眼をやると、七階建てぐらいの古びた赤煉瓦の建物があり、道路ぎわにトラックが三、四台とまっていた。下は広い壁をとり払って横長の作業場のようなものになっていた。新聞の発送場である。見上げると、屋上近くに該当の新聞社名の看板が出ていた。

正面出入口は反対側らしい。八木は横手の路地を歩いた。なんだかじめじめとしている。ずいぶん前の新宿の裏通りを想い出した。

デリー・ニューズ社の玄関に入ったが、受付も守衛もいなかった。つき当りを右に曲ったと

ころにリフトがあった。八木が5のボタンを押しかけたところに、ちぢれ毛ののつぽの男と、赤毛長髪の背の低い男とがスエーター姿でかけこんできた。

八木は五階に出た。壁ぎわに細長い通路が延びている。それに沿って事務所ふうな^{いれ}檜色の板壁が^{つづ}づいていた。通路の天井のうすぐらい電灯が、^い檜色の鈍い艶と、三つならんだドアの真鍮^{しんちゆう}とを光らせていた。上に「中央政経日報社ロンドン総局」の日本文と英文の二つの横看板がならんで出ていた。

八木は三つの室のうち、どの真鍮のノブを回したものと、寝台車のコンパートメントのように^{つづ}づくドアを眺めた。とつづきの部屋の中からはテレックスの音がしている。これは受け放しのようで、紙をちぎり取る音がしない。そのうち耳に日本語の高い話し声が聞えてきた。まん中のドアからである。彼はそこをノックした。話し声がやんだ。

ドアが細めに開き、日本人のまるい眼がのぞいた。

「どなた？」

まるい瞳^{ひとみ}で、じろりとこっちの風采^{ふうさい}を見た。

「ローマ支局の八木と申します」

ああ、とまるい眼が軽くなずいたが、四分の一ほど開いたドアはそのままにして、ちょっとお待ちくださいと引込んだ。

その隙間^{すきま}の白い壁に、新聞社のカレンダー用のカラー写真、シルクロード風景らしい一部が見えた。中ではひそひそ話をしている。

左側のドアの中は話し声こそなかったが、紙を繰る音、イスのきしる音、脚を動かす靴音などがしている。テレックスが勝手に鳴っていた。

中のドアが内側からいっばいに開いた。

「どうぞ、お入りなさい」

まるい眼が中途半端な笑顔で全身を現わした。三十半ばの顔である。モヘアか何かの白いスエーターで、グレイの綾織りのズボン、片手にパイプの頭を握っていた。

横を見ると、ちぢれ気味の髪を撫でつけた色の浅黒い、四角な顔の、肩の張った四十男が、金庫を背に、イスに股をひろげていた。深沢総局長であった。

八木正八は名刺といっしょにローマ支局長岩野俊一の封書を総局長にさし出した。

深沢菊治はイスから立ち、八木の名刺をうけとり、ちょっと活字に眺め入ったあと、どうぞ、と横わきに空いている机のイスを八木にすすめ、自分が先に腰をどっかと落した。

「遠いところを、ご苦労さんですな」

深沢は塩辛声で八木をねぎらい、岩野の添書の封を切って眼を動かした。太い頸のせいで、スポーツシャツの衿もとが開き、ネクタイがゆるんでいる。

頬の赤い、パイプを握った男は左手のドアから次の部屋に消えた。テレックスの文字をのぞき、ついでにそこに居る人間と話しこみに行ったのだろう。

深沢は浅黒い顔を上げて手紙をたたんだ。文面は長くない。

「あんたのことは、一昨日、岩野君がローマから電話をかけてきたので、あらまし聞いていたけどね」

彼は眼を小さくし、額と鼻の頭に皺をよせ、にやにや笑いながら、塩辛声でいう。

「あんたの取材に応援してくれということだ。せつかくの岩野君の頼みだし、こちらとしては極力お手伝いしたい。けどな、ロンドンも忙しいでなア。人間はたしかに三人居る。そのほかにア

シスタントが二人、前からの常勤です」

つまりは現地採用の雇員、辞令の上では八木と同じ身分の臨時雇である。

「全部で五人のスタッフ。短期間の応援に一人くらいは出せると思うだろうが、そう思われるのが、ぼくは、たいへんにつらい。……」

隣りの部屋からふたたび白のスエーターの男があらわれ、八木の対い側の斜めにあたるイスに黙ってすわり、綴込みの新聞をひろげた。机の上に立てかけたスクラップ・ブックや参考書や部厚い年鑑類などで、その姿はかくれている。

ドアの向うでは相変らずテレックスの単調な音がつづいていた。

「そのうえに、ね」

と深沢は大きな嘆れ声で、八木正八にむかつてつづけた。

「ロンドン総局はヨーロッパの遊軍みたいなところがあつてな。ヨーロッパの西に東に北に南に、重要な国際事件が発生すると、本社の外報部長の電話一本でこの国、どこの都市でも飛び立たされる移動特派員、体のいい便利屋のようなものさ、ロンドン総局の役目の一つはな」

斜め向うで綴込みの新聞をひろげている男が笑った。新聞の上にパイプの煙が輪になって出ていた。

「まあそれは、あんたが来る前に岩野君から電話があつたときに云つておいたことだがね。……しかも事件はいつなるとき勃発するかわからん。東西緊張の現在だから、事件の種類、時期、だれにも予想がつかん。ロンドンで首相や閣僚の共同記者会見に出たり、国会の演説を聞いたり、外交の方針、政界の情報などをさぐる本来の仕事で手いっぱいなのうえに、そういうのがあるんだからな」

深沢総局長の云いたいことは、要するにローマ支局長からの「乞^こ応援」を拒絶するにあった。「ここにいる経済担当の辻本次郎君にしても、外を回っている社会担当の早川秀夫君にしても、それぞれに自分の仕事を抱えながら多くの忙しいところを手伝ってくれてますよ。それでなくては、とてもやってゆけない」

それにしても二人とも、のんびりとしていた。テレックスの単調な音がつづく。

通路側のドアがノックされて、女性が紅茶を運んできた。

褐色のショート・カット、背はそれほど高くない女が紅茶の道具を両手に抱えて入ってきて、カップ三つを起して順々に茶を注いだ。衿の白い、うすい臍^{へんじ}脂色のワンピース。化粧の少ない顔がうつむいて立ちのぼる湯気を避けている。鼻の頭がすこし上に反^そっていた。白い陶器に電灯の光が溜^たまった。

「ありがとう、Mrs.」

なんとかと深沢は礼をいった。彼女は唇の端だけを笑^えませたが、三十をすこしすぎたかと思われた。

彼女は通路側ではなく、つづき部屋になっているドアを開けて消えた。開けた瞬間だけテレックスの音が高かった。さきほど聞いたこの部屋の紙をめくる音やイスのきしる音などの気配は、彼女だったのだ。

「あの女性は」

深沢は紅茶のすすり音を無遠慮に立てていった。

「ウチのアシスタントです。二代前の総局長いらいだが、仕事がよくできる。ロンドンの下町生れ。地理に精通。その点でも、われわれ日本人特派員の弱点をカバーしてくれている。早川君に